

もう君を幸せにできんと泣いた夫（つま）

津市在住 主婦 多賀 洋子

1942年生まれ、25歳で結婚した。夫は元京大教授。雲出（くもず）川河畔の自宅でのインタビュー。夫は63歳で京大退官。2007年2月にここへ来た。夫が音に敏感になり静かな地に引越しをしてきた時はわくわくしていた。

退官後、アレツと思うようなことがあった。教授室の荷物を一週間かけて自宅に運び込んだ。夫にご苦労さん！と言ったと同時に、私にもご苦労さん！・・と言ってと話したところ、運んだのは一日だけだろう！といわれた。退官してすぐのことだった。その後、認知症が進み、2011年12月12日に亡くなった。自分の経験が認知症介護者に役立つことを願い「ふたたびのゆりかご」を出版した。現在、講演もしている。介護家族の会を自宅で開催もしていて忙しかった。

夫とは自分が車を運転してよく走った。夫は大阪大学の出身、京大薬学部の助手に就職。自分は四期生で学校で出会った。なまぐらな学生で就職したが文学がしたくフラフラしていた。夫から「おれの細腕にたよってみなはれ！」と大阪弁でプロポーズされ夫27歳、自分25歳で結婚した。亡くなる半年ほど前に、「人生であんたと結婚したことが一番よかった！」と言ってくれた。言葉は大切だと思う。

津市に引越時、夫は色々な手続き書類に漢字が書けなくなっていた。公衆電話もかけられなかった。音に非常に敏感になったのも認知症の症状だった。新しい自治会に入ったが人づきあいを嫌がった。犬の散歩でも前から人が来ると逢わない様にコースを変えていた。つりが好きで、休みの日には早くから出かけていたが、前日にやる「しかけ」が出来なくなった。

先輩の先生から夫の言動がおかしいと電話がかかってきて国立医療センターで脳の検査をうけたが、その時の結果はたいしたことない・・程度であった。2003年ごろから好きなスケッチを始めた。私が運転手をしてあちこち行ったが2006年ごろには絵も書けなくなった。同じことを何度も尋ねる。自分が植えた苗を平気で踏みつける。よく口げんかをした。夫の姉が事故死した時はかなりふさぎこんでいた。あるとき運転していて昼、パトカーに捕まった。その晩、夫は目がすわり、警察はけしから・・とわめていた。後で判ったことだが、この行動は認知症の「夜間せん妄」というものだとかだった。本人は自分は正常と思っているので病院には連れていけなかった。早期受診を本人が拒否！これが最初のハードルだった。ほとんどの方がこれを経験する。現役中だと仕事のミスが重なり本人が病院に出向くケースもあるが.....

府中に娘と孫がいるので逢いに行きたかったが、夫は出かけたがらず閉塞感が3年間続いた。物事に共感することがなくなってきて、すべて自分の胸の中に閉じ込めていくようになり、何の為に生きているのか・・と思った。

自分の心を覗いてみると、何かを待っている。やましい！「夫のおかしな状態から逃れたい！」だった。認知症の介護者は皆、同じような気持ちを持っているのでは・・引越してきて三年目、夫は庭で「自分は君を幸せにしてあげられない・・死にたい！」と呆然としていた。

その後、少しおかしなことがあっても口にださないようにした。笑顔で答えると笑顔が返ってきた。

一人で専門の先生に会いに行った。症状を説明するとアルツハイマー型の認知症であろうといわれた。一年後に喉にものがつまり本人が病院に行きたいと言った。チャンスと思いい病院に出かけた。中期の認知症と診断された。治ることのない認知症だが病院で確認され、一種の安堵感がでた。

夫には結果は伝えなかった。その後、介護サービスを受けられる申請をした。認定は要介護3のレベルだった。2006年末からデーサービスを受け始めてから夫婦の関係も安定してきた。2008年末まで続いた。その前は暗黒の3年間で、口喧嘩ばかりしていた。2008年末から症状が進行。スケッチブックに執着しはじめ、何でもスケッチブックだと思いカバンに詰め込んだ。羞恥心もなくなり立小便が多く、新幹線のホームでも立小便をした。これも認知症の症状。昼と夜を取り違えることもあった。わからせようとしても無理。行方不明になった事件もあった。110番へ電話し捜索。3時間後、隣町で発見され警察車で戻ってきた。

自分の状態を理解しながら「妻を幸せできない・・」と嘆いている夫の姿をみてハットした。自宅を改築し、西口かつよさん運営のシルバーサービス施設に夫が通い始めてから変化が出た。とても温かい所だった。夫はダジャレを連発し始めた。意外であった。始めは知り合いの家を訪ねると言って夫を誘った。施設で最初の言葉、多賀先生！と呼ばれて安心感がでて嬉しそうであった。自分の息抜きの時間が欲しくて夫を施設に送り込んだが、施設は夫の数少ない社会生活の場になった・・と知った。西口さんとは交換ノート（様子の連絡）の授受で色々学んだ。認知症の人が幸せになるには周りの手助けが必要。認知症の人は、なにもかにもわからなくなるのではない。自身で少しずつおかしくなることがわかり不安感を持っている。

自分がC型ウイルス、インターフェロンの治療で入院せざるをえなくなった。心の医療センターの先生のアドバイスで夫も入院、向精新薬のおかげで精神的にも安定した。夫の3ヶ月の入院後、特別養護老人ホームから入所OKの連絡をいただき悩んだ末、入所を決断。夫の住所が移動することを始めて知った。食事・排泄・睡眠は施設に任せる。自分は頻繁に施設に行って精神的に支える。

最後まで在宅で介護をしたいと思っていたが手におえなくなってきた。現在300万人の認知症介護者がいる。認知症の患者は何もかにもわからないのではない。たしなめたり、おこったりすると悪循環。混乱した人間の奥の気持ちを再発見する努力が必要です。最後の最後は在宅から社会的サービスも視野にいれること。時々、施設からドライブに連れ出し車の中で歌を歌った。さだまさしの「関白宣言」を聞いていたとき、夫は「自分の人生はよかった！あんたと結婚したこと！」の言葉を聴いてびっくりした。夫は言葉を司る分野の脳は損傷を受けてなかった。